

みなみ  
しま  
はち  
まん  
南島八幡のご神体

むかし。

神社の境内は、子どもたちにとつて  
かつこの遊び場所だった。きょうも  
南島八幡社では、村の子どもたちがお  
おぜい遊んでおった。竹馬競争をする  
者、チャンバラごっこ、たが回し、石  
けりをする者、みんな思い思いに楽し  
そうに遊んでいる。

大黒さんという人は、

- 一に 俵をふんまえて
- 二に につこり笑って
- 三に さかずき 手に受けて
- 四つ 世の中よいように



五つ いつものごとくにて

六つ 無病息災むびくさいで

七つ 何事なんごとないように

八つ 屋敷やしきを広め建て

九つ お倉を打ち広め

十で どうとう治おきまった

と、まりをつきながら歌っている子もいる。境内は、子どもたちのにぎやかな声であふれておった。そのうち、ひとりの男の子が、

「たが回しやめた。馬どびするもの寄よつといで。」

と、大きな声で呼びかけた。

「あたいも入れて。」

「おれも入る。」

と、子どもたちはほかの遊びをやめて、馬どびの遊びの中に入ってきた。

「だれが馬になるか、じゃんけんぽん。」

「あいこでしょ。」

「善助ぜんすけさの負け。」

と、口々にいいながら一列にならんで、着物のおしりをはしよつて、馬役の背せな中なかにとび乗った。そのうちのひとりがお堂の中に入っていったかと思うと、ご神体を持ち出してきて、

「これを馬にするべえ。」

といった。子どもたちは、ひとしきりご神体を馬にして遊んでおつたが、その遊びにもあきて、その場にほうり出したまま、みんな家に帰ってしまった。

夕ぐれの道を、ひとりぐらしの女の人を通りかかった。うす暗がりの中にぼんやりとご神体があるのに気がつくや、

「あれ、こんなところに仏ほとけさまがござるわ。なんと、もつたいないこつちや。ナムアミダブツ、ナムアミダブツ。」

とお念ねん仏ぶつを唱えながら、仏さまとまちがえて家へ持ち帰った。さつそく箱はこを用意してその上に祭り、日々供養くようしておつた。

ところが、毎日仏さまに向かつて拝おがんでいるうちに、不思議なことに気がついた。いつもはおだやかなやさしいお顔でこちらの方を見ていらつしやる仏さまが、我が身のけがれの日には、わきの方を見てしまう。おかしなこともあるものと、村の人に聞いてみた。しかし、だれもが、

「不思議なこつちやな。」

「はて、なんじゃろうな。」

と、首をかしげるばかり。そこで、延命寺えんめいの和尚おしょうさんにたずねてみようということになった。さっそく和尚さんに見てもらったところ、

「おお、これはまぎれもなく八幡社のご神体じゃ。もつたいないこつちや。」  
と、像ぞうを伏ふし拜まゐむのだった。

こうして、子どもたちによって持ち出された八幡社のご神体は、無事にお堂に帰りつくことができたということだった。

大府地区に伝わる話です。

大府駅から南東の方にのびる東海道本線の二本の線路にはさまれて八幡社があります。南島八幡社と呼ばれているこの社は、現在も境内の南が児童遊園地になっており、子どもたちの遊び場になっています。